



〈一冊の本〉

レイコフ・ジョージ (George Lakoff) 著
池上嘉彦 (いけがみ よしひこ)・
河上誓作 (かわかみ せいさく) 他訳

認知意味論

一言語から見た人間の心

紀伊國屋書店 8,544円十税



我々の抱える問題の多くが命名に端を発している、という考えは新しいものではありません。孔子は、それがすべての社会不安と衰退の根底にあると主張して、物事に適切な名前を与えることが哲学の重要な役割だと考えました。ジョージ・レイコフの著書「認知意味論一言語から見た人間の心」は、この命名における問題に新しい接近法として、認知言語学の基礎になりました。

本の原題、「Women, Fire and Dangerous things」(女、火、危ないもの)はレイコフが議論しようとした事柄をよく表しています。そもそもタイトル中の3つの名詞はどのように関係づけられるのでしょうか？実はDyirbal (オーストラリアの言語)では、これらの3つの名詞は、Dyirbalの名詞に4つある(文法上の)性のうち、第2性名詞のグループに含まれる名詞です。レイコフはDyirbal語話者が任意にこれらの名詞をまとめているのではなく、これらの名詞の間には関係があるという議論を展開し、事実上、範疇化のシステムはすべて、表示の対象の外的特徴だけに基づくのではなく、我々人間がそれらの物とどのように関わっているか、また、比喩や換喩および心像を通した結びつき方に深く関わっていると主張しています。

レイコフはこの著作の中で広範囲にわたる言語現象を網羅していますが、特に日本人の読者にとって興味深いのは、日本語の「～本」のような数助詞の言語学的扱いに説明がつくことではないでしょうか。細かな例に関しては異論もあるかと思いますが、レイコフ氏は例えば「なぜ『～本』が鉛筆や紙やロープだけでなく、カセットテープ、本、テレビ番組にも適用されるのか」についての一般的な説明を与えており、日本語を母国語としない自分にとっても興味深い考察です。また英語の比喩の意味に興味をお持ちの方ならば、レイコフ氏の様々な説明によってより理解を深めることができると思います。

私がこの著書をご紹介する理由は、自分の研究と教育活動に大きな影響を与えたということだけでなく、レイコフ氏が言語に関して与えている洞察が非常に重要と考えるためです。言語の作り出す認知的枠組みを調べていくと、実は言語はある状況を単に記述しているだけではなく、我々の物事を見る視点や、描写されている人間に対する見方に影響を与える付加的な概念をも取り込んでいることがわかります。

(本研究所研究員 ジョセフ・トウメイ 言語学)